その年、和歌山にいった

王　志剛
教育学部　交換留学生　中国

「光陰矢のごとし」、このことわざのように、私が和歌山で暮らした時間はあっという間に過ぎてしまいました。最初は新しい環境に馴染むのにいろいろ工夫して抵抗もありましたが、今から考えると、その奮闘してきた日々はすでに大切な思い出になり、生活に対する認識と人生に対する理解を体得させてくれたのです。そのため、この機会に、一年間の和歌山での留学生活にきれいに終止符をつけようと思います。

留学する前、私は期待を抱き、自由で心地よく暮らせることに憧れてきました。空港から会館までバスの外からの光景を眺めていると間違ったことに初めて気づきました。あの時、私はこう思いました、和歌山での生活は思うほどたやすくはないかもしれない。この思いは和歌山に対する私の初めての困惑となりました。

また、バスや電車に乗るたびに、心が痛むほどの料金の高さを痛感しました。例えば、百円はここの一番安い料金にも足りないですが、中国ではどの都市でもその都市を回ることができます。今でも考えられないのです。ひょっとすると、交通費こそが先進国と途上国の格差の一つの表れではないかと私は思います。交通費が高いためか老若男女を問わず、日本の方はみんな自転車であるいはジョギングで移動しているようです。こういう行動は環境保護の後ろ盾となり、節約志向を後押ししているのではないかと考えられます。ですが、ある道路の狭さに驚いてすごく心配したこともあります。もし狭い道で向こうから一人が自転車で抜けようとすると、もう一人は止まって相手を避けなければならなくて非常に面倒だと思います。もし、みんなは交通規則を守って逆行しなかったら、このような心配もなくなるのでしょう。

留学生活をはじめるにつれ、物価への不満も日ごと募ってきました。同じ価格で中国では思う存分にスイカを丸ごと楽しめるのに対して、日本では八分の一のスイカしか口にできません。それに、中国では二本三本も簡単に買えるミネラルウォーターは日本では一本しか買えないというのもけっこう大変なことです。後からようやく気づきました。日本の物価水準は当地の人々の収入状態の間でよいバランスが取られています。言い換えると、物価があまりに高いというわけではなく、私がお金をもっていないからです。それと、たくさんの食品などが他の都道府県から運送されるので、道理で地元の人までそれらの値段に不満をいうのです。

和歌山で暮らし、一番感心し、印象深いのはここの落ち着きと地元の方々の親切さです。都市の日常に慣れてきた私にとって午後十一時は夜の始まりですが、十時になると静まり返るようになった町で暮らす私は「不思議」のほかに何も考えられません。ここは本当に日本かとさえ思ってしまいます。これはこの土地の性格かもしれません。大都市のやかましさから逃げ出し、特有の穏やかさを保っているところだからこそ、私は和歌山が好きになったのでしょう。夜はどんなに過ごしづらいときでも、その安らかな雰囲気のお陰で、ぐっすりと眠ることができるのです。学校に通う途中、自主的に道路を空けてくれる運転

手の方、交差点で通行人の安全を見守ってくれるボランティア、こつこつと働いていて笑顔で親切に挨拶をしてくれる地元の方々をみると寂しがり屋の私までが初めてその心遣いを感じ、友好で親切さに感動して、元気が出るようになったのです。

このように、私は最初のうんざりする状態から脱出し、だんだん和歌山の生活に慣れ、最後は生活をたのしめるようになったのです。生活してたきた過程で、笑いにつけ涙につけ、辛いにつけ楽しいにつけ、痛みにつけ喜びにつけ、いろいろ体験して、忘れがたい思い出を作って来ました。

残念ですが、限られた時間のなかで、もうすこしどこかに出掛けようとか学ぼうと思ってもなかなかできなくて､たぶん今後の私は今の私を許すことができないでしょう｡でも、この私を笑わせたり泣かせたりする和歌山はきっと一生忘れることはないだろうと私は思います。

なぜなら、忘れたくないからです。